

公益財団法人日米医学医療交流財団 アメリカ短期看護研修助成

研修報告書 (2016年度 助成者)

作成日 2016年11月8日

氏名 (フリガナ)	小田 真里 (オダ マリ)
研修地	アメリカ・オレゴン州ポートランド市
研修期間	2016年10月9日(日)～ 10月15日(土)
所属機関名	静岡市立清水病院
身分	看護師

この度は、とても貴重な研修に参加できたことに感謝します。日米の看護の違いや、患者さんへの対応の仕方、高い専門性を維持するためのモチベーションについてなど学びたいことはたくさんあり、強い意気込みを持って参加の申し込みをしました。しかし、出発前は不安と緊張が強かったです。成田空港でトラベルパートナーズの方、日米医学医療交流財団の方が明るく送り出してくださり安心したことを覚えています。ポートランド空港でも現地スタッフが迎えに来てくれ、緊張をほぐしてくれました。終始私たちを気遣い、通訳やガイドをしてくださり、とてもよい研修になりました。研修地であるオレゴン州ポートランドは自然豊かでした。野生のリスを初めて見ました。木々は紅葉していて、ポートランド州立大学の近くはまるで絵画のようでした。

今回の研修で、多くの病院や施設で見学やレクチャーを受けることができました。どこに行ってもホテルのような綺麗さ快適さがありました。アメリカでは、病院は選ばれる時代であり、専門性に特化していなければならないということでした。日本では看護師はジェネラリストで広く浅くというのが基本で数年ごとに異動がありますが、アメリカではスペシャリストが基本です。病棟ごとに就職するため、他の科に行くためには、就職活動からしなければならぬそうです。専門性を高めるために努力することは、当たり前なことであるという姿勢に、私も頑張らなければならないと思いました。

現地の看護師から日本の看護師は、自分はここができないとか反省から入る人が多いと言われました。私もその一人だと思いました。自分は何が得意なのか、どこに自信があるのかと胸を張って言えるようになりたいです。

オレゴン州は、尊厳死が認められた最初の州であり、終末期医療に関するレクチャーがありました。緩和ケアにとっても積極的に取り組まれていました。緩和ケアチームがあり、その中で看護師は、きちんと意見を主張することができるそうです。私は、終末期の患者さんと関わる機会が多くあります。患者さんの死について考える前に、自分の死生観についても考えなければならないと思いました。自分はどうしたいのか、自分の家族が終末期を迎える時にどうしたいのか、いざというときには冷静に考え判断することができません。日頃から考え、きちんと意思表示しなければならないと思いました。

オレゴン州では、食事摂取できなくなったときに、経管栄養や胃瘻にするのか、急変時に、心臓マッサージや人工呼吸器をつけるのかなどを冷蔵庫に貼っているそうです。望まれない医療がしなくていいようにしているそうです。患者さんに寄り添い意思を理解できる看護師になりたいです。

今回の研修で、職位や年齢は異なりますが、向上心が高く看護にとっても興味を持っている仲間と出会え、刺激を受けました。この研修に参加できたことは一生の思い出になりました。本当にありがとうございました。